

A年特定15 マタイ15章21―28節

〔直訳〕

- 21 そして 出て来て そこから
イエスは 退いた 地方へと テイルスの そして シドンの。
22 そして 見よ カナンの女が その地域出身の
出て来て 叫んだ 言いつつ、
「憐れんでください 私を、 主よ ダビデの子よ。
私の娘が ひどく 悪霊に憑かれています」。

23 だが彼は ない 答えた 彼女に 言葉を。

そして 近づいて 彼の弟子たちが 願っていた 彼に 言いつつ、
「去らせてください 彼女を、
というのは 彼女は叫ぶ 私たちの後ろで」。

24 だが彼は 答えて 言った、

ない 私は遣された 以外は イスラエルの家の失われた羊へと。

25 だが彼女は 来て ひれ伏していた 彼に 言いつつ、

「主よ、 助けてください 私を」。

26 だが彼は 答えて 言った、

ない である 良く

取ることは パンを 子どもたちの そして 投げることは 小犬たちに」。

27 だが彼女は 言った、

「そうです 主よ、

それでも 小犬たちは 食べる

パン屑から 食卓から落ちるもの(から) 彼らの主人たちの」。

28 そのとき 答えて イエスは 言った 彼女に、

「おお 女よ、 大きい あなたの 信仰は。

起これ あなたに とおりに あなたが望む」。

そして 癒された 娘は 彼女の その時刻から。

A'

〔新共同訳〕

- 21 イエスはそこをたち、テイルスとシドンの地方に行かれた。22 すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。23 しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」24 イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない」とお答えになった。25 しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」

と言った。26 イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやっつけてはいけない」とお答えになると、27 女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいたただくのです。」28 そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

①構成

①a 第一段落 (21―22節)

⑦ 第一段落と第三段落は、カナンの女性の「主よ、ダビデの子よ」という呼びかけとイエスの「女よ」という呼びかけによって対応している。彼女の「主よ」という呼びかけは25・27節にも見られるが、27節では彼女がイエスの言葉に同意し、「そうです。主よ」と呼びかけて語ると、イエスは彼女の言葉に信仰を見て取る。イエスは「子どもたちのパン」と言うが(26節)、彼女はそれを「主人たちの食卓から落ちるパン屑」と言い換えている。「主人たち」は「主よ」と同じ語の複数形である。この言い換えは彼女の信仰の現れと言える(27節の並行箇所マコ7:28では「子どものパン屑」となっている)。

① 第一段落 (A) と第三段落 (A') が対応し、Aはカナンの女性の願いを述べ、A'はその成就を述べている。これらに挟まれる第二段落がBである。ここでは、カナンの女性の願いを拒否するイエスの態度と言葉が述べられている。

①b 第二段落 (23―26節)

⑦ 23・24・26節には、否定詞の「ない」が繰り返されている。23節では、娘の癒しを願うカナンの女性に、イエスは「言葉を答えない」つまり「一言も答えない」と述べられている。24節では、「イスラエルの家の失われた羊へと以外は、私は遣わされていない」と言い、26節では、「子どもたちのパンを取って、小犬たちに投げることは良くない」と言って、イエスは彼女の願いを拒否し続ける。並行箇所マルコ7章24―30節には、23―25節にあたる部分がないので、マタイではイエスの否定的な態度が強調されていることになる。

①c 第三段落 (27―28節)

⑦ 拒否され続けても、カナンの女性は忍耐強く助けを求める。イエスは彼女の言葉に大きな信仰を見て、娘の癒しを保証する。今はイスラエルに救いが限られている時であるから、「子どもたちのパンを取る」ことはできない。しかし、主人のものでも、「落ちたパン屑」なら、イスラエルの救いを横取りすることにはならない。イスラエルを「主人」と呼び、神の計画に従おうとする彼女の信仰にイエスは動かされる。

②主に叫ぶ (21―22節)

①a イエスは「テイルスとシドンの地方」へと退いた。テイルスは地中海に面したフェニキアの町で、カルメル山から55キロほど北にある。シドンはテイルスの北方35キロに位置するフェニキアの港町である。両方とも異邦人の町である。預言者エリヤは主の言葉によってシドンの町サレプタに行き、その町をやもめの家の客となり、やもめの息子を生き返らせている(王上一七8以下)。サレプタはテイルスとシドンの中間に位置する。

⑤創世記12章5節、民数記33章51節では、カナンとはヨルダン川西側の地を指しており、民数記13章29節、14章25節、ヨシュア記1章4節では東地中海沿岸の地、もしくは平野部を指している。ここでは、「その地域出身のカナンの女」と述べて、ティルスとシドンの地方出身の女性を「カナンの女」と呼んでいる(イザ二三11)。

⑥「ダビデの子」という称号をイエスに用いたのは、主にパレスチナに住むユダヤ人キリスト者である。これに対して、「主」という称号はパレスチナを越えたヘレニズム世界のキリスト者によって用いられた。カナンの女性はイエスを「主よ、ダビデの子よ」と呼び、二つの称号を一つに合わせているが、それによってイエスはメシアであるという、ユダヤ人の大多数が否定した信仰を表明している。イエスは、まずはイスラエルに遣わされたメシアであったが(マタ一五24・26以下)、この異邦人の女性はイエスを「主」と呼び、メシアの慈しみを異邦人の世界にも及ぼしてほしいと懇願する。

⑦「私の娘がひどく悪霊に憑かれている」とカナンの女性は叫ぶ。「ひどく」という語は並行箇所マルコにはない(マコ七25「汚れた霊に取りつかれた幼い娘」。マタイは「ひどく」を挿入することによって、異邦人が救いを必要とする状況にあることを強調しようとしている。

③子どもたちのパン(23―26節)

⑧23節では、一言も答えないイエスに弟子が近づいて、「彼女を去らせてください」と願う。「去らせてください」と直訳した語は、もとは「解き放つ・去らせる」を意味し、「病気から解放する」(ルカ一三12)の意味でも使う。この言葉には二つの解釈がある。

⑨単純に「追いつ返してほしい」の意味。

⑩「彼女の望みをかなえて、帰してください」の意味。

この段落の強調点がイエスの否定的な態度を示すことにあるなら、後者の解釈の方がよいかもれない。弟子はカナンの女性に同情し、早く癒してあげれば良いと思っっているのに対して、イエスは彼女の願いを拒否し続けており、マタイは両者の対比を意識的に強調している。

⑪もしマタイが「望みをかなえてあげてください」という意味で「去らせてください」を用いているなら、24節のイエスの発言、「イスラエルの家の失われた羊以外のところには、私は遣わされていない」は、願いの成就を求めただけの信仰を否定していると言えなくもない。この場合、病気からの解放を願うカナンの女性と彼女に同情する弟子に対して、イエスは自分がただの奇跡行者者ではないことを示していることになる。イエスは神に忠実な「神の僕」である。イスラエルが救われた後、救いが異邦人へともたらされるといふ神の計画に従って、イエスは行動している。

⑫イエスは「イスラエルの家の失われた羊以外のところには、私は遣わされていない」と言う。マタイ10章6節で、イエスは弟子に「むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい」と命じている。弟子の派遣命令と同じ内容が、ここではイエス自身の派遣に関して述べられている。この他、マタイではイエスが自分の派遣について語る箇所は10章40節と21章37節である。後者はたとえ話(ぶどう園と農夫のたとえ)であるが、ここと同様にイスラエルに限定された派遣を述べている。地上のイエスが派遣されたのはイスラエルのためであるという主張は、メシアをイスラエルのためのものと考えていたユダヤ人にとって意味があった。並行箇所のマルコ

7章27節は「まず、子供たちに十分食べさせなければならぬ」と述べて、やがて始まる異邦人宣教を暗示しているが、マタイにはこの言葉はない。マタイはユダヤ人キリスト者の立場から、マルコは異邦人キリスト者の立場から議論を進めている。ただし、マタイでも、イエスは復活した後、弟子をすべての異邦人へと派遣している(二八16以下)。

㉑ 「失われた羊」は、エゼキエル34章4-6・16節を背景とする表現であり、イスラエル全体が確固たるものを失い、神の導きを求めてさまよう様子を表している。また、イザヤ53章6節やミカ2章12節を思い起こさせる。この句はイスラエルの罪深さを述べるというよりは、イスラエルの牧者であるイエスはメシアであることを間接的に示す表現である。

㉒ 「ひれ伏す」は「跪いて崇拜する・礼拝する」を意味する。イエスはメシア的王として、また神の子としてあがめられ、礼拝される(マタイ2・8・11、八2、九18、一四33、二〇20、二八9・17)。カナンの女性はひれ伏した上に、「主よ、私を助けてください」と願う。彼女の叫びは詩編の祈りに見られる(四四24以下、六九2、七九9、一〇九26など)。

㉓ ユダヤ人にとって「犬」はひどい侮蔑を込めた表現である(サム上二四15、サム下三8、九8、一六9、王下八13)。ラビたちは律法を知らない人々を「犬」と呼んでおり、マタイ7章6節の「犬」は異邦人を指していると見られる(詩二二17・21)。ここでの「小犬」という発言はイエスのものではなく、ユダヤ人キリスト者が加えたのかもしれない。

㉔ イエスはカナンの女性の懇願に対して一言も答えず、さらに25節でもカナンの女性は助けを願うが、それもイエスは拒否する。イエスのこの頑な態度はどのように解釈されるべきだろうか。

24・26・28節には、イエスが「答えて言った」という表現がある。

24節 だが彼は答えて言った

26節 だが彼は答えて言った

28節 そのときイエスは彼女に答えて言った

24・26節では、イエスが誰に答えたのかが述べられていないが、28節には、「彼女に」とイエスの答えた相手がかかれていいる。26節の並行箇所であるマルコ7章27節の原文には「彼女に言った」とあるから、マタイが「彼女に」を省いたと考えられる。文脈から見てイエスの答えた相手はつきりしている28節では相手を省略せず、それに対して、24・26節で省いているのは、答えの相手を曖昧にしておきたかったからである。

㉕ 24・26節のイエスの言葉は弟子とカナンの女性に向けられているが、それにもましてイエス自身に向けられている。イエスは、「自分はイスラエルにのみ遣わされており、イスラエルに与えられる救いを異邦人に与えることは良くない」ということを他人に語るといふより、自分自身に言い聞かせている。それを暗示するためにマタイは「彼女に」を省いている。カナンの女性の望みをかなえたいが、異邦人の救いの前にイスラエルが救われねばならないという神の計画に従って、イエスは行動している。

④ 主人の食卓から落ちるパン屑 (27-28節)

㉖ 27節三行目の冒頭は、文脈から「それでも」と直訳しているが、これは二語からなる表現で、そのまま訳すと「そしてなぜなら」となる。カナンの女性はユダヤ人を優先するイエスの方針に

同意するが、自分の求めがそれと矛盾しない理由を述べて、「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑なら食べることができる」と機知にとんだ発言をしている。

⑥イエスは彼女の発言に対して、「おお、女よ、大きい、あなたの信仰は」と言う。「おお、女よ」はここでは感嘆を込めた呼びかけである(マコ七29にはない)。また「大きい」という形容詞が主語(あなたの信仰)の前に置かれて、強調されている。カナンの女性は「子どもたち」を「主人」と言い換え、神の思いに従う者であることを示す。その信仰がイエスによって称賛される。

⑤神の計画に従う信仰

① ユダヤ人はイエスをメシアと認めず、イエスの奇跡を見ても悔い改めなかった(マタ一19―20)。しかし、異邦人の百人隊長はイエスを「主」と呼んで、自分の僕の癒しを願ひ、カナンの女性もイエスを「主」と呼び、さらに「ダビデの子」と呼んで、イエスがイエスラエルのメシアであることを認め、自分の娘を癒してくれるようにと願う。

② しかし、イエスは彼女に一言も答えない。弟子たちは、彼女を「去らせてください」とイエスに願う。弟子たちは叫び続ける彼女に同情したのか、あるいはうるさいと思ったのかもしれない。ともかく弟子たちは彼女が自分たちの後ろで叫ぶことを止めさせて欲しいと願っている。力づくで彼女を追い払うのであれば、イエスに願わなくても自分たちで追い払うことができたはずである。弟子たちがイエスに「去らせてください」と願ったのは、力づくで追い払うのではなく、イエスにしかない神の力によって彼女を去らせて欲しい、つまりこの女性の望みどおり、「奇跡を起こして欲しい」と弟子は願っているのだと思われる。弟子たちは、熱心に願う女性に同情しているのである。

③ その弟子の願いをイエスは拒否する。なぜなら、イエスはイスラエルの失われた羊を導く羊飼いで、神から「遣わされた」からである。神の救いの力が具体的な出来事を通して現されるためには、特定の時代と場所と民が必要である。すべての人の救いを望む神が救いの器として選んだのは、弱く小さなイスラエルである。力ある民ではなく、取るに足りない弱い民に救いが与えられる、その民の上に神の栄光が輝くなら、異邦人の誰もが神の働きの大きさを悟るに違いないからである。神の救いの計画に従うイエスは、願いをかなえるだけの奇跡は行わない。今はまだ救いがイスラエルに与えられる段階ではない。だから、「子どものパン」を取り上げることにはできない。イエスは自分の使命を確認するように、否定の答えを続ける。

④ カナンの女性は「そうです、主よ」と言つて、イエスの言葉に同意する。彼女は神の救いの計画に従う信仰を持っている。彼女は「子どものパン」を願うことはしない。「主人の食卓から落ちるパン屑」なら、今、異邦人に与えられても神の計画を損なうことにはならないはずである。この機知に溢れた言葉にイエスは彼女の信仰を見る。

⑤ イエスは遠く離れていても、言葉だけで病を癒すことができる。「あなたが望むとおりにあなたに起これ」とイエスが語ったとき、娘は癒される。カナンの女性の願いが聞き入れられたのは、彼女が神の計画に従う信仰を示したからである。マタイでは、イエスの復活と共に異邦人宣教が始まる(二八19)。イスラエルを通して異邦人が救われることが神の計画だからである。単なる奇跡を求める熱意ではなく、神の計画に従う信仰をイエスは求めている。この出来事は、やがて始まる異邦人宣教の先取りと言える。